

高齢障害者の口腔の健康の決定要因に関する研究

著者	星 久美
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第19802号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133196

論文内容要旨

学 籍 番 号 B7DD1034 氏 名 星 久 美

【目的】知的障害者においても高齢化は新たな課題となっており、本研究では、障害者の口腔内状況と歯科保健行動に関する調査を行い、加齢に伴う口腔内の変化を把握するとともに、歯科受診行動に関与する因子を検討して、高齢障害者の歯科支援ニーズを明らかにすることである。

【方法】同意が得られた31事業所を利用する障害者780名において歯科健診結果と質問調査のすべてに有効回答があった477名のデータを解析対象とした。データは年代別に集計し、歯科受診の有無により、要因ごとに分布が異なるのかを検討した。さらに、どの要因が定期的歯科受診行動と関連があるのかを多変量ロジスティック回帰分析により解析した。

【結果】対象者477名の平均年齢は 37.0 ± 18.2 歳であり、125名(26.2%)が定期的歯科受診をしていた。口腔内状況は、障害のない同年代の者と比較して、現在歯数が少なく、未処置歯および4mm以上の歯周ポケットを有する者の割合が高かった。単変量解析により、定期的歯科受診者と非定期的歯科受診者間で、「年齢」「障害種別」「施設種別」「未処置歯数」「未処置歯の有無」「プラーク付着の程度」「歯石付着の程度」「4mm以上の歯周ポケットの有無」「歯肉出血の有無」「ブリッジ装着の有無」「介助磨きの有無」「歯科受診時の付き添い者の有無」の12項目において有意差を認めた。

上記12項目を説明変数、定期的歯科受診の有無を目的変数にし、ロジスティック回帰分析を実施し、「歯科受診時に付き添い者が必要」「歯磨き時の介助がある」「その他の障害がある」「未処置歯がある」「歯石沈着が1/3以下」の5項目が定期的歯科受診と有意に関連する項目として抽出され、中でも「歯科受診に付き添い者が必要」(オッズ比11.64)が、最も重要な決定要因であった。

【考察】障害者において、口腔機能の維持に重要な定期的な歯科受診をするためには個々の状況に適した歯科受診のための介護者の確保、介護者の口腔保健への理解を得ることが重要である。そのためには、歯科受診の予約および通院時の介護や移動に関わるサービスのマネジメントを一元的に行える行政主導のシステム構築が必要である。そのシステムにより、口腔の加齢現象が顕在化する40代以前に家族以外の介護者を普遍的に存在させ、対象者自身が高齢になるまで定期的歯科受診が切れ目なく継続可能となる。結果、本研究で浮き彫りとなった障害者の口腔機能の早期喪失を防止し、障害者のQOLを歯科的見地から向上させることが実現できると思われる。

【結論】障害者の年齢に関わらず、口腔保健に関する知識・技能・態度をもつ介護者を確保、通院しやすい環境の整備及び障害者個々の状況に合わせた支援を継続することが、高齢障害者の口腔の健康のために重要である。